

江戸の地誌編さん

～ 地域史の発見 ～

平成 20 年度における東京都公文書館ロビー展示第二弾では、当館所蔵の名所案内記・地誌類の紹介を通して、18 世紀半ば以降の歴史意識の高まりに伴い、江戸幕府や江戸の知識人たちがどのような歴史を描こうとしていたのかを探ります。

展示期間：平成 20 年 9 月 1 日（月）～ 10 月 24 日（金）

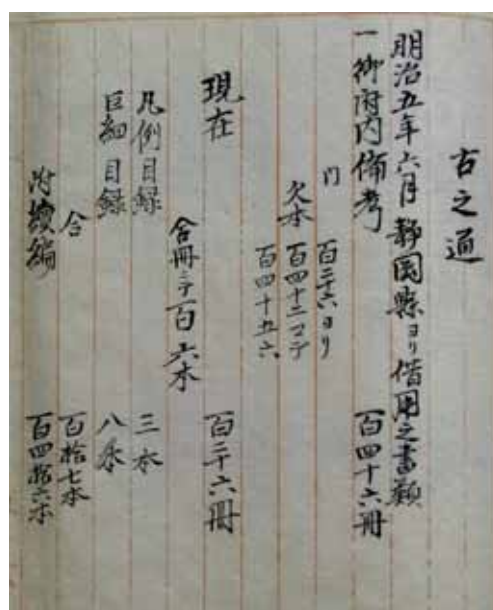
期間中の土曜日・日曜日・祝日は休館となります。

展示場所：東京都公文書館 1 階ロビー 展示コーナー

展示内容・資料の紹介

江戸幕府の地誌編さん

地誌編さん事業は、寛政改革の政策の一つとして、老中松平定信が構想したことに始まります。その背景には当時、日本近海に出没していた外国船に対する危機意識があり、幕府には国土の再掌握が必要とされていました。しかし寛政期には実現に至らず、享和元年（1801）頃、林述斎の建議によって、ようやく本格的にスタートしたのです。同 3 年（1803）昌平黌内に地誌調所が設置されると、学問所勤番等から人員が集められ『新編武蔵風土記稿』・『御府内備考』等が次々とまとめられていきました。幕府は、それまで中国の『大明一統志』を地誌のモデルとして意識していましたが、この編さん事業を通じて村別構成を基本とする和文の地誌をつくり出しました。その過程で参考資料として収集された



『事務引継書類』第一（部分）

地誌調所が所蔵していた武蔵国関係の地誌・絵図類が、静岡県を経て東京府に引き継がれる様子が分かります。

地誌類が『編脩地誌備用典籍解題』に紹介されています。これらの地誌類は明治初年に一旦、静岡県に移されましたが、その後、東京府に移管され、現在は当館に所蔵されています。

< 展示資料 >

資料名	年代	請求番号
間宮士信他撰『新編武蔵風土記稿』	天保元年(1830)	CI- 1 ~ 80
三島政行他編『御府内備考』	文政 12 年(1829)	DG-162 ~ 422
松平定常他撰『武蔵国備用典籍解題』	文政 3 年(1820)	CI-299・300
『事務引継書類』第一【前頁写真】	明治 8 年(1875)12 月	604-A4-1

名所案内記の展開

江戸時代初頭の名所案内記は、物語性が強く紀行文に近かったのですが、享保期を過ぎると地域別あるいは項目別に構成された実用性の高いものが刊行されるようになりました。この背景には江戸の町の発展と寺社・名所めぐりの流行があります。ここでは、嘉永 3 年(1850)正月、京都から江戸に来た金座役人青木成喬の在府中の日記をもとに、彼が公務の合間に廻った名所をたどります。成喬は浅草寺や両国界隈を頻繁に訪れていますが、このほかにも 2 月には十軒店で雑店見物、6 月は山王祭礼、8 月は隅田川で月見というように江戸の風物を楽しんでいたようです。成喬が目にしたであろう江戸の風景を『江戸名所図会』や『東都歳事記』で紹介します。

< 展示資料 >

資料名	年代	請求番号
青木成喬『在府中日記』	嘉永 3 年(1850)正月	CN-121
斎藤幸成編・長谷川雪旦画『江戸名所図会』	天保 5・7 年(1834・36)刊	CI-159 ~ 178
斎藤幸成編・長谷川雪旦画『東都歳事記』 【下写真】	天保 9 年(1838)刊	CI-211 ~ 215



『東都歳事記』(部分)

山王祭礼では各町から出される趣向を凝らした「練り物」が見所になっていました。左の写真は大評判になった麹町の練り物で、朝鮮通信使をイメージしたものです。

文人たちの歴史研究

19世紀に入ると、地誌は、江戸名所をまわる旅行者のための実用性だけでなく、歴史考証的な成果をふまえた内容を備えていきます。神田雉子町の町名主斎藤家が親子三代でまとめた『江戸名所図会』はその代表と言えましょう。考証的な手法に基づく地誌が編さんされていく背景には、18世紀半ば以降、文書や典籍、金石文、美術工芸品等の「モノ」にこだわり、考証学的にそれらを分析した文人たちの影響がありました。ここでは、幕臣でありながら狂歌師としても知られる大田南畝、同じく幕臣で古物に関する著作がある加賀美遠清を取り上げ、こうした考証家たちの歴史意識を探ります。彼らは徹底した現地調査と模写の作成、文献資料の精読によって歴史にせまっています。

< 展示資料 >

資料名	年代	請求番号
大田南畝『調布日記』	文化6年(1809)	DB-47
大田南畝『玉川披砂』	文化6年(1809)	DB-29
加賀美遠清『集古一滴』	18世紀後半頃	DB-237
大久保忠寄『江都好古記』	18世紀末頃	DB-238

歴史意識の広がり

歴史への関心は、江戸近郊農村においても高まりをみせ、地誌をまとめたり、名所を創り出す人々が現れました。武蔵国多摩郡関戸村(現東京都多摩市)名主相澤伴主もこうした地方文人の一人です。彼は『太平記』等をもとに、関戸村が、元弘3年(1333)、新田義貞の軍勢が鎌倉幕府軍を打ち破った古戦場であることを発見し、横溝八郎(鎌倉幕府軍の武将)の墓をはじめとする様々な合戦史蹟を創出しました。こうした彼の歴史意識は、江戸幕府や都市知識人には認められることはありませんでしたが、『調布玉川惣畫圖』という川絵図の刊行を通じて多摩川流域の村々には、広く受容されていきました。

< 展示資料 >

資料名	年代	請求番号
相澤伴主原案 長谷川雪堤浄書 『調布玉川惣畫圖』 [右下写真]	弘化2年(1845)刊	654.27-2.1 調布
大田南畝『向岡閑話』	文化6年(1809)	DB-42

『調布多摩川惣畫圖』(部分)

関戸村周辺には、古歌に詠まれる名所や古戦場の歴史を物語る史蹟が多く描かれています。遠景に富士山を配したところに相澤伴主の歴史意識がうかがわれます。

